

アニオタからアニメーション史研究者へ ——日本留学感想文

東京大学大学院総合文化研究科 博士課程

陳龔

「日本語専攻でもなく、日本語学校に通ったこともない。アニメを見て日本語を覚えました。」最初に日本へ来た時、これが私の定番の自己紹介でした。いまでも覚えています、アニメを見すぎたせいか、大学一年生の時、学生寮で海賊版アニメの「名探偵コナン」の一話を見て、10分も経って突然あるセリフが分からなくなってはじめて、「あ、字幕がついてない」と気づき、いつの間にか日本語の「文盲」になっていました。それから日本語を自分でまじめに勉強するようになったのです。

「平成生まれ」と同じように、中国では「85後」という世代がいます。この世代は様々な特徴が指摘されてきましたが、そのうち、「日本アニメと優秀な中国アニメの両方をみて育ってきた」という代表的な特殊性があるけれど意外と注目されていません。私の親世代が日本映画とドラマの「大熱愛世代」と言われ、日本でも研究されていますが、私が所属する「85後」も日本メディアに注目されたものの、アニメの側面はほぼ語られていません（私の世代の後は中国のいい作品がなくなって、日本アニメだけをみる世代もいましたが、2004年からは海外アニメがテレビで見られなくなって、ようやく最近になり少し柔軟になったのです）。

実際、「アニメ好き→日本文化に興味を持ち始め→日本で生活してみたい→日本留学」、私と同じような道を辿ってきた中国人留学生がたくさんいます。正直なところ、最初日本語を自分で勉強したとき、目的としては字幕・翻訳なしで原版のアニメとマンガが理解できるようになりたかっただけです。でも日本のコンテンツをみればみるほど、作品の中で描かれた世界、様々な中国にない年中行事に憧れて、もっと知りたくなってしまいます。これが日本アニメとマンガの最大の魅力であり、その産業が国家のソフトパワーになれる理由でもあると思います。

なぜ日本ではいつも高校生が世界を救う？学園祭にはなぜ女装する男性が必ずいる？日本人が犬より猫を好きな理由は？ダメ男は主人公で素敵な女の子たちに愛されるという設定が主流になれる社会背景は？日本に来る前に、すでに頭の中で質問が溢れて、あの時、高校時代は理系で、学部時代にマーケティング専攻で文系研究に対する概念が全くない私はまだ知らなかった——まさかこれらの正直な問いが「研究動機」になれることを。

「Interest is the best teacher. (好奇心は最良の教師なり。)」この名言は昔から聞きましたが、まさかアニメに対する情熱が研究につながるとは思わなかったです。アニメ研究はやはり日本でこそ成立する研究領域です。最初に日本語を独学しはじめたときには絶対想像できなかったでしょうね、字幕なしでアニメをみたい気持ちが、20万字の日本語の博論を支えるなんて（笑）。

アニオタ(アニメーションのオタク)からアニメーション研究者に変身。(或いは進化?)これが私の日本留学です。

(コスプレ写真と私が学部時代に作った私のキャラクターイラストを添付します。アニオタの証明です。(笑))

